

Charleston Conference Asia 参加報告

日本で“Charleston型対話イベント”は可能か

— ベンダーの立場から考える成立条件 —



日本の知を元気にする！

SUNMEDIA

Knowledge Bloom



2026年3月5日

株式会社サンメディア 土肥 加代子

Kayoko.doi@sunmedia.co.jp

Charleston Conference Asiaで見たもの

図書館・出版社・ベンダー等が、立場を超えて参加できる



図書館・出版社・ベンダーといった利害関係の異なる立場の人々が、対等に議論を交わせるセッションが多数

- ✓ ワークショップ形式（参加型）
- ✓ ラウンドテーブル形式（参加者が平等な立場で発言）
- ✓ ライトニングトーク形式（参加型、交流促進）



議論が発生するように「設計」されていた

活発な議論はセッション時間だけじゃなかった



- 休憩時間には会場のあちこちで自然発生的に意見交換が行われていた
- 登壇者・参加者の区別なく対話していた
- 名刺交換・商談という感じではなく、「テーマの続き」を話している様子だった



プログラム外でも議論が継続！

まとめ



- 図書館・出版社・ベンダーが対等な関係で参加
- 立場や業種を超えた率直な議論
- 営業イベントではなく「課題共有」を重視

議論が起きるように設計されていた
“Charleston型対話イベント”

日本で開催するとしたら？

日本で開催するとしたら…何が課題となるか？



1. 日本開催の必然性（海外からわざわざ日本に来る理由）
2. 参加費・出張承認のハードル
3. 言語設計（英語メインのイベントにどれだけ人が集まるか/英語で深い議論ができるか）
4. 対話型・議論型への心理的抵抗
5. 誰が主催するか



すべてを解決して開催するには時間がかかる！

まず隗（かい）より始めよ



事を始めるには、自分からやりださなければならない。人に言いつける前に自分が積極的に着手せよ、という意味。「隗（かい）」は戦国（せんごく）時代の燕（えん）の人で、郭隗（かくかい）という人。この句の意味は、現在では少し異なり、**大事を始めるには、小事から手をつけよ、大事業には、呼び水となる小さなことから始めるのが必要だ**という意味にも用いる。また我が国では、「まず、あなたがやりなさい」という意味に使うことが多い。

三省堂. 「三省堂 辞書ウェブ編集部による ことばの壺」.
<https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/kotowaza49>, (参照2026-03-04)

現実的なスタート案



いきなり国際会議を目指さない、日本国内イベントから始める



~~1. 日本開催の必然性（海外からわざわざ日本に来る理由）~~

解決

~~2. 参加費・出張承認のハードル~~

ほぼ解決

~~3. 言語設計（英語メインのイベントにどれだけ人が集まるか/英語で深い議論ができるか）~~

解決

4. 対話型・議論型への心理的抵抗

5. 誰が主催するか

残るはこの課題

対話型・議論型への心理的抵抗

対立を含む議論に慣れていない



私たちは「対立＝人間関係が悪くなるもの」という無意識の前提を設定しがちで、
“議論”と“批判”が混同されやすい。

→本当は違和感があっても言いにくい。

特に学術情報業界は「長年の関係性」がある分、なおさら言いにくい。



「合意を目指す場」にはしない。
「立場の違いを出し切る場」にする。

それぞれの立場に事情があり、組織を代表して発言することが難しい



- 個人として考えていることはあるが、公式には言えない
- 自組織の不利になることは言えない
- “自分の発言が組織を代表する”プレッシャー

→タテマエに包まれた議論になり、本質に触れられない



「個人としての意見」を許可する

では、どうするか



業界全体の課題をテーマにする

- 予算の縮小
- AIによる構造変化
- 研究環境の疲弊…など

**業界内で戦うのではなく、業界全体の構造課題に対して
協力するために対話する**

誰が主催するのか

誰が主催するのか



ベンダー単独主催は難しい

- 営業色が出てしまうリスク
- 本音が出にくくなる



共同設計型・主体はコミュニティであることが望ましい

まずは、どうするか



まずは、完璧じゃなくても小さくスタートしてみる



コミュニティを醸成する（本音で話し合える関係性の構築）



- **継続的な対話の場を提供 → 協業プロジェクトの創出！**
- **提言・ホワイトペーパーの作成 → 国への政策提言！**

...

さいごに：今後の可能性



**私たちは
私たちの未来を議論する場を
自ら設計できるだろうか？**



小さな形であれば、今年中にも可能だと思っています！